

丞相、祠堂、何處尋。
錦官城外柏森森。
映階碧草自春色。
隔葉黃鸝空好音。
三顧頻繁天下計。
兩朝開濟老臣心。
出師未捷身先死。
長使英雄淚滿襟。

丞相の祠堂は何れの處にか尋ねん。
錦官城外柏森森。
階に映ずるの碧草自ら春色。
葉を隔つるの黄鸝空しく好音。
三顧頻繁天下の計。
兩朝開濟す老臣の心。
師を出して未だ捷たざるに身先づ死し。
長へに英雄をして涙襟に満たしむ。

蘇臺覽古

李

白

舊苑荒臺楊柳新。
菱歌清唱不勝春。
只今惟有西江月。
曾照吳王宮裏人。

舊苑荒臺楊柳新なり。
菱歌清唱春に勝へず。
只今惟西江の月のみあり。
曾て照す吳王宮裏の人。

【解釋】昔吳王夫差の豪華を極めた姑蘇臺は、今や苑舊り臺荒れて見る影もなく、柳が昔ながらの緑を呈してゐる。昔の絃歌の聲は絶えて、今はあちこちで村女の歌ふ採菱歌の清み渡つた聲が春の空氣を振はして響いて来る。之を見之を聞いては實に感慨に堪へない。たゞ今日まで残つてゐるのは西江の上に輝く月のみで、この月こそ昔吳王の宮女（西施等を指す）さもを照したところのものである。

越中懷古

李

白

越王句踐破^{ツテ}吳歸^ル。

越王句踐吳を破つて歸る。

義士還^{ツテ}家盡^ク錦衣^ス。

義士家に還つて盡く錦衣す。

宮女如^ク花滿^ニ春殿^ニ。

宮女花の如く春殿に滿ちしが。

只今惟有^リ鷓鴣^ノ飛^ブ。

只今惟だ鷓鴣の飛ぶあり。

【解釋】越王句踐が吳を破つて國に歸るや、戰に従つた忠義の士は恩賞にあづかつて錦衣玉食の榮華に誇り、宮中の美女は花の如く粧を凝らして殿中に滿ちてゐた。それも一場の夢と消え滅び、今は鷓鴣の飛びかふのみである。

早發^ク白帝城^ニ

李

白

朝辭^ス白帝彩雲間[。]

朝に辭す白帝彩雲の間。

千里江陵一日還^ル。

千里の江陵一日に還る。

兩岸猿聲啼^{イテ}不住^{マラ}。

兩岸の猿聲啼いて住まらざるに。

輕舟已過^グ萬重山[。]

輕舟已に過ぐ萬重の山。

【解釋】朝早く彩雲の棚引く頃、白帝城を舟出して、千里もある江陵へ其の日の中に着いた。兩岸の山で啼く猿の一聲が、まだ終らないうちに、吾が乗れる舟は早くも萬重の山を突破し去るほど、流が急速であつたから。

山中問答

李

白

問^フ余^ニ何^ノ意^ヲ栖^ム碧山^ニ。

余に問ふ何の意を碧山に栖む。

笑而不答心自閑。

笑つて答へず心自ら閑なり。

桃花流水杳然去。

桃花流水杳然として去る。

別有天地非人間。

別に天地の人間に非ざる有り。

【解釋】人あつて余に問ふに「君は如何なる所存で、かゝる深山に隱遁の生活をなし給ふか。」と。余は其の間に對してただ微笑するのみで、何等の答もしない。けれど裏に自ら安んずる所あつて心は自然と閑である。遙かに流れゆく水を挾んで、桃花の紅に咲き匂ふところ、そこには俗界と全く異つた別天地が存在する。故に此の碧山を樂しんで栖むのである。

望廬山瀑布水

李

白

日照香爐生紫煙。

日は香爐を照して紫煙を生ず。

遙看瀑布挂前川。

遙に看る瀑布の前川に挂るを。

飛流直下三千尺。

飛流直下三千尺。

疑是銀河落九天。

疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるか。

【解釋】日光は香爐峰を照らし、山は紫に煙つて、見るからに美しい景色である。そこには一大瀑布が吾が面前の川流を目がけて、勢猛く流れ落ちてゐる。其の三千尺もあらうと思はれる高所から、眞直に落下する狀の雄大なことは、さながら天の川が天空から落ちてゐるかと思はれるばかりである。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

李

白

故人西辭黃鶴樓。

故人西のかた黃鶴樓を辭し。

烟花三月下揚州。

烟花三月揚州に下る。

孤帆遠影碧空盡。

孤帆遠影碧空に盡く。

惟見長江天際流。

惟見る長江の天際に流るるを。

【解釋】 吾が友孟浩然は西の方黃鶴樓を去り、霞たなびき花笑ふ三月の好氣節に、一葉の舟に乗り揚州を指して長江を下る。吾名殘を惜んで樓上より見送れば、孤帆の影は漸く遠く、やがて碧空の中に消えてしまつて、茫々たる長江の天に連つて流るゝを見るのみである。

別董大

高

適

十里黃雲白日曛。

十里の黃雲白日曛す。

北風吹雁雪紛紛。

北風雁を吹いて雪紛紛。

莫愁前路無知己。

愁ふる莫れ前路知己無きを。

天下誰人不識君。

天下誰人か君を識らざらん。

【解釋】 暗澹たる黃雲があたり一帯を覆うて、天は將に雪ふらんとしてゐる。日は既に西に傾いてどんより曇つて見える。折から北風が烈しく起つて空飛ぶ雁の群も離されさう。雪は盛に降つて來た。かゝる物凄しい天候に、降りしきる雪を冒して旅立たれる君の心中は、定めし心細いものがあらう。けれども行く先に知己の無い事なき愁ふるには及ばない。天下廣しと雖も、到る處君の盛名を識らぬ人は無いのだから、どこへ行つても、人が知己として慰待してくれるであらう。心丈夫に勇ましく發足し給へ。

題長安主人壁

張

謂

世人結交須黃金。

世人交を結ぶに黄金を須ふ。

黄金不^レ多^{カラ}交不^レ深^{カラ}。

黄金多からざれば交深からず。

縱令然諾暫^{シテ}相許^{スモ}。

縱令ひ然諾して暫く相許すも。

終^ニ是^レ悠悠^{タル}行路^ノ心。

終に是れ悠悠たる行路の心。

【解釋】世間の人は交際を結ぶに金を目當にする。だから相手が金持でなければ交情も深くない。たごひ暫くは心を許して交つてゐるやうでも、金が盡きれば交も絶えて、しまひには縁もゆかりもない路傍の人のやうになつてしまふ。

楓橋夜泊

張

繼

月落^チ烏啼^{イテ}霜滿^ツ天^ニ。

月落ち烏啼いて霜天に滿つ。

江楓^ノ漁火對^ス愁眠^ニ。

江楓の漁火愁眠に對す。

姑蘇城外^ノ寒山寺。

姑蘇城外の寒山寺。

夜半^ノ鐘聲到^ル客船^ニ。

夜半の鐘聲客船に到る。

【解釋】月も傾き烏も啼き霜氣が天に滿ちて夜がさうやら明けたらしい。フト舟の窓から顔を出してあたりを見ると、川邊の楓樹の間の漁火が點々として、旅愁に惱まされて熟睡の出来なかつた我が目に寫つた。さては夜明けではなかつたナと思ふ折しも、姑蘇城外の寒山寺の夜半を告ぐる鐘が、水を渡つて吾が舟に聞えて來た。

再到楓橋

張

繼

白髮重^{ネテ}來^ル一夢^ノ中。

白髮重ねて來る一夢の中。

青山不^レ改^ス舊時^ノ容。

青山改めず舊時の容。

烏啼月落寒山寺。

烏啼からすき月落つ寒山寺。

欵枕猶聽半夜鐘。

枕そはだを欵そはだてて猶聽く半夜の鐘。

【解釋】余はかつて此に遊んで一夜眠られぬまゝに夜泊の一詩を得たのであつたが、爾來歲月は夢の間に去來して、いつか白髮の老翁となつてしまつた。今再び此の地を訪れて見るに、あたりの青山は舊時ながらの容をして、昔に變つた余を迎へてくれた。若かつた當時が懐しさに、以前のやうにまた夜泊して見るに、相變らず烏啼き月傾く時、頭をもたげて、今でもなほ寒山寺に撞き出す半夜の鐘の音を聴くことが出來た。

度桑乾

賈

島

客舍并州已十霜。

客舍へいしゅう并州すいで已に十霜。

歸心日夜憶咸陽。

歸心かんやう日夜おも憶咸陽。

無端更渡桑乾水。

端はし無く更さうかんに桑乾の水を渡り。

卻望并州是故郷。

卻かへつて并州を望めば是れ故郷。

【解釋】并州の地に客となつて暮すこと已に十年、此の間日さなく夜さなく故郷の咸陽に歸りたいと思はぬ時はなかつた。然るに此の度、圖らずも并州の地を去つて更に北に行く身となつて、今此の桑乾河を渡り、此處から永年住んだ并州の地を眺めやるに、これまでは親しめぬ土地であつたが、今はなか／＼懐しく、却つて故郷のやうな慕はしさを感ずる。

左遷至藍關示姪孫湘

韓

愈

一封朝奏九重天。

一封ぼつ朝きつちように奏す九重の天。

夕貶潮州路八千。

夕ゆふべに潮州てうしうに貶へんせらる路八千。

欲^ス下^ニ爲^メニ聖明^ノ、除^カ弊事^ト上^ニ。
肯^テ將^ツ衰朽^ヲ、惜^マ殘年^ヲ。
雲^ハ橫^ニ秦嶺^ニ、家^ハ何在^カ。
雪^ハ擁^ニ藍關^ヲ、馬^ハ不前^マ。
知^ル汝^ガ遠來^ル、應^ニ有^レ意^シ。
好^シ收^メ我^ガ骨^ヲ、瘴江^ノ邊^ニ。

離別

丈夫^ハ非^ズ無^キ涙^ヲ。

聖明の爲めに弊事を除かんと欲す。
肯て衰朽を將つて殘年を惜まんや。
雲は秦嶺に横はつて家何くにか在る。
雪は藍關を擁して馬前まず。
知る汝が遠く來る應に意有るべし。
好し我が骨を收めよ瘴江の邊。

陸龜蒙

丈夫涙無きに非ず。

不^レ灑^ガ離別^ノ間^ニ。
仗^ツ劍^ニ對^シ樽酒^ニ。
恥^ヅ爲^ス游子^ノ顏^ヲ。
蝮蛇^ハ一^タ螫^サ手^ヲ。
壯士^ハ疾^ク解^ク腕^ヲ。
所^レ思^フ在^リ功名^ニ。
離別^ノ何^ゾ足^ラ歎^ズ。

題烏江亭

離別の間に灑がず。
劍に仗つて樽酒に對し。
游子の顔を爲すを恥づ。
蝮蛇一たび手を螫さば。
壯士疾く腕を解く。
思ふ所功名に在り。
離別何ぞ歎ずるに足らん。

杜

牧

勝敗^ハ兵家事不^レ期^セ。

包^ミ羞^ヲ忍^レ耻^ヲ是男兒[○]。

江東子弟多^シ才俊[○]。

捲土重來未^ダ可^レ知^ル。

勝敗は兵家事期せず。

羞を包み耻を忍ぶ是れ男兒。

江東の子弟才俊多し。

捲土重來未だ知る可からず。

【解釋】一勝一敗は時の運であるから、如何なる名將と雖も豫期し得べき事ではない。さればたとへて敗れても一時の耻辱を忍んで再舉を圖るのが眞に男兒の本領と謂ふべきである。亭長の言の如く揚子江東の地、方數千里、衆十萬人、而も豪俊の子弟も多いことであるから、そこに渡つて事を擧げたならば、疾風土を捲くの勢で大勢を挽回し得たかも知れぬものを、徒に死んだのは惜しい事をしたものだ。

長城

汪遵

秦築^{イテ}長城^ヲ比^ス鐵牢^ニ。

蕃戎不^シ敢^テ逼^ラ臨洮^ニ。

焉知^{ラン}萬里連雲^ノ勢[○]。

不^レ及^バ堯階三尺^ノ高^キ。

秦長城を築いて鐵牢に比す。

蕃戎敢て臨洮に逼らず。

焉ぞ知らん萬里連雲の勢。

及ばず堯階三尺の高きに。

【解釋】秦の始皇帝が築いた萬里の長城は、さながら鐵の如く堅固であつた爲めに、流石の匈奴も敢て臨洮を越えて侵略を企てるさうな事はなかつた。然し始皇は奢侈を極め、虐政を恣にしたので、僅か三世十五年で亡んでしまつた。されば萬里に亘り雲際に連つた長城も、其の效果に至つては徳を以て天下を治めた堯帝の三尺の高さしかない土階にも及ばなかつた。力を以て従へるのこ、徳を以て化するのこの異なる所以が自らこゝに明である。

焚書坑

章

碣

竹帛煙消^{エテ}帝業虛^シ。

竹帛煙消えて帝業虚し。

關河空鎖^{シク}祖龍^ス居。

關河空しく鎖す祖龍の居。

坑灰未^ダ冷^エ山東亂^ル。

坑灰未だ冷えざるに山東亂る。

劉項元來不^マ讀^レ書^ヲ。

劉項元來書を讀まず。

【解釋】 書籍を取上げてこれを焼き、人民が政治を非議するのを禁じようとしたが、其の煙の消える時には、早くも秦の帝業は衰へ果て、たゞ要害堅固な山關河水が、空しく秦皇帝京の地を圍んでゐるのみである。而して書を焼いた其の灰が冷えきらぬ中に山東地方は先づ陳勝、吳廣・によつて亂され、之に繼いで秦を滅した劉邦や項羽は元來書を讀まぬ人々であつた。されば始皇が書を焼いて天下の無事を圖つたのは結局勞して甲斐なき愚策であつた。

昭和十一年八月二十五日印刷
昭和十一年九月一日發行

【非賣品】

編輯人兼
發行人

別府市立別府中學校雜誌部
代表者 平 瀨 藤 二

印刷人

別府市南町八七
梶 原 君 三

印刷所

別府市南町八七
東 洋 印 刷 社

發行所

別府市立別府中學校雜誌部

正誤表

頁行	誤	正
四ノ六	感 ^ス ニ九垓 ^ヲ	感 ^ズ ニ九垓 ^ヲ
三ノ六	松柏 ^ニ 吼 ^ユ 天 ^ニ 颯 ^ニ	松柏 ^ニ 吼 ^ユ 天 ^ニ 颯 ^ニ
四ノ五	日月はこ過ぎ去つて	日月は過ぎ去つて
五ノ一	綠樹陰濃かにして	綠樹陰濃かにして
七ノ七	磐溪	磐溪
二六ノ一	吟斷 ^{きんだん}	吟斷 ^{きんだん}
一五ノ五	居氏	居民
一六ノ四	同日語	同日語
一六ノ九	秋堂風露	秋堂風露
二〇ノ二	逼 ^ラ 臨 ^ニ 洗 ^ニ	逼 ^ラ 臨 ^ニ 洗 ^ニ

終

